

木島平小だより



平成27年10月30日(金)
第8号 木島平小学校

昇降口前にあるみどりの森の木々が次第に色づきはじめ、秋の深まりを感じるようになりました。秋は、スポーツや読書、そして学習などへ集中して取り組みやすい季節です。子どもたちは体育の授業で、校庭でサッカーやハンドベースなどをし、体を動かす心地よさを感じ合っています。

半年が過ぎ、本年度の教育活動も後半に入りました。子どもたちが、集中した取組の中で、成長の手応えを感じ取れるよう支えて参ります。



全校稲刈り

5年生が中心となって育ててきた田んぼの稲穂が黄金色に輝き収穫の時期を迎えました。9月30日(水)に、全校で稲刈りをしました。

姉妹学級でペアをつくり、上級生が鎌で稲を刈る、下級生が刈った稲を受け取り5年生へ渡すという流れ作業で稲刈りを進めました。6年生児童が、「まだ、稲を持てる?」と言いながら、1年生に刈った稲を優しく渡していました。どの子ども、自分の役割があり、その役割にやりがいを感じながら、力を合わせて取り組む様子が伺えました。



稲刈りでは、佐藤さん、小池さん、丸山さんに協力していただき、安全に手際よく作業を進めることができました。ありがとうございました。

祖父母参観・PTAスポーツ大会

17日(土)に、祖父母参観日を実施しました。

授業では、粘土細工や俳句を祖父母の皆さんと一緒に作ったり、自分たちが社会見学で学習したことを発表したりしたクラスがありました。祖父母の皆さんが、子どもと一緒に活動したり、発表に耳を傾け見守ったりしている時の言葉かけや表情が、子どもたちを温かく包んでいました。子どもたちは、この温かさに支えられて健やかに成長していることを感じます。



午後に行われたPTAスポーツ大会では、学年ごとにチームを作り、フラバールバレーを楽しみ爽やかな汗を流すことができました。

祖父母の皆様、保護者の皆様、ご来校いただきありがとうございました。

校内音楽会

◆音楽会に向けて高めていく、最高のハーモニーづくり

5日（月）からステージ練習を始め、どの学年・学級も毎日少しずつ努力を重ね、歌声や演奏のハーモニーを創り上げていきました。子どもたちは、休み時間にも、自主的に自分が演奏する楽器の練習をしたり、ランチルームなどで歌声づくりに励んだりしました。

「鍵盤ハーモニカをがんばりたい」「歌は笑顔で、言葉ははっきり歌いたい」「合奏のくり返しをあきらめずにがんばりたい」などと音楽会に向け、一人一人がめあてを作成しました。また、クラスみんなで考え合い、発表曲を紹介する言葉を創りました。

最後のステージ練習の演奏には、本番に向けて子どもたちに自信と安心が感じられ、期待感をより一層高めていました。音楽会という目標に取り組む過程を通して、仲間と心をつなげて取り組むことのよさと、達成感を感じ取ることができたようです。

◆心を合わせ奏でられた最高のハーモニー

28日（水）に、第6回校内音楽会を実施しました。テーマ「友と奏でる 最高のハーモニー」のもと、体育館一杯に美しいハーモニーを響かせることができました。どの学年・学級も、心を込めた自分たちのステージを創り上げ、友だちと一緒に奏でるハーモニーを楽しむことができたと思います。演奏を終えて、座席へ戻っていくときの子どもたちのホッとした笑顔や、満足そうな表情がとても印象的でした。

音楽会を終えた子どもから、「とってもいい音楽会になってよかった」「合奏を楽しくやれた」といった声が聞かれ、達成感や満足感が伺えました。子どもたちは、音楽会を通して、自分の役割に責任を持ってやり抜くことや、友達と気持ちをそろえて支え合うことなどを経験し、成長することができました。

保護者の皆様、地域の皆様には、子どもたちの演奏を熱心に鑑賞いただきありがとうございました。子どもたちは、皆様に温かく見守っていただいたことで、これまでの練習の成果を存分に発揮して美しい音色を奏でることができ、しっとりとした音楽会を味わうことができました。



「きじの恩返し」

10月29日（木）

昔、韓国の山奥に貧しい木こりが住んでいました。今日も森の中で薪を採っていると、どこからともなく「ケーン、ケーン、ケーン」と悲しそうな声がしました。「あっ、蛇だ!」、蛇が、きじの卵をねらっていました。木こりは、「よしっ、俺が助けてやるぞ」と棒を振り上げて、蛇と戦いました。木こりがきじに向かい、「もう大丈夫だ」と言うと、お母さんのきじは、「ケーン、ケーン」と嬉しそうに鳴きました。



木こりは、生まれた村を離れて旅に出ました。木こりが長いこと歩いていると、道に迷ってしまいました。すると、そこに一軒の家がありました。窓から暖かそうな明かりがさしていました。木こりは、「あの家に泊めてもらおう」と思いました。屋敷は、今まで見たこともない立派なものでした。屋敷に行くと、木こりを美しい娘さんが、ニコニコして迎えてくれました。屋敷に入ると、おいしそうなご馳走が次々と出てきました。まるで夢のようでした。「どうしてこんな広い屋敷に、一人で住んでいるのですか」と、木こりは訊ねました。すると、娘が答えました。「私はかたきを待っているのです」と、答えました。続いて木こりが、「そのかたきはどこにいるのですか?」と訊ねると、「ここにあります。お前がかたきだ。私は、あのとき森の中で殺された蛇だ」と娘が言いました。「ああ、どうか許してください」「お前を食い殺してやる」木こりは、「お願いします。私は、きじの命を助けてあげたかったのです。卵を守ってあげたかったのです。卵は、生きるものの命です。どうかお助けください」と、娘の前に手をついて頼みました。娘が、「お前がそんなに言うのなら、一つ、賭をしよう。この山奥に、誰もいない寺がある。そこに鐘撞き堂がある、ここに居て、その鐘を鳴らしてみろ。それができたら、お前を助けてやる」と言いました。木こりが、「ここに居たままで、鐘を鳴らすだなんてとてもできません」と言うと、娘は、「夜明けまで待ってやろう」と言いました。

娘は、やがて、おそろしい蛇の姿に変わっていきました。やがて夜が明けました。蛇が口を開けると、舌が炎のようにメラメラと動きました。「あの山の頂に、朝日が差したら、お前を食い殺す」と蛇が言いました。木こりは怖くて、口もきけません。「おっ、朝だ。お前もこれでおしまいだな」と蛇が言ったその時、山の向こうから「ゴーン」とかすかに鐘の音が聞こえたように思えました。続いて、「ゴーン、ゴーン」と鐘の音が大きくなり、谷間にこだましました。蛇は、体をくねらせて苦しそうに叫びました。「ええい、仕方がない!お前にはまだ命がある」と言って、蛇の姿はやがて消えました。気がつくと、木こりは、寂しい森の中に倒れていました。立派な屋敷も、ご馳走も、何もかもが消えていました。

木こりは立ち上がると、鐘の音がした方へ歩き始めました。「きじよ、ありがとう。私を助けてくれたんだね。お前のくちばしで、鐘をついてくれたんだね」と、木こりは、大きな声で泣きました。

私たちの木島平村にも、きじがたくさん住んでいます。今度、きじを見たら、校長先生のお話を思い出してください。